新たなる来訪者

　ミスティックルーイン

自分達を作り出したマスターと別れ、一通りの騒動が終了し、少し静かな時となった頃。
このお話は、その騒動が終わったあとの物語である。

「うーーん。　今日もいい天気ー」

１人、工房内から外へと出てきたテイルス。
本日も１人、工房内でのメカの作業をしていた。
今は丁度休憩時間となった時だ。
テイルスは１人工房の外へと出ると、近くの柵にもたれ、空を見ていた。
天気は良く過ごしやすい気候のため、とても気持ちのいい陽気だった。

「風が気持ちいい。」

テイルスは周辺で吹く風に前髪をなびかせながら、そう呟いた。
日差しも申し分ないため、少々眠くなりそうだった。

そんなのんびりとした時間を、テイルスは１人過ごしていると、

「そこの君。」
「？」

ふと、何処からとも無く声を掛けられた。
テイルスは自分に声を掛けた存在を探すべく、辺りを見渡した。
だが、近くには誰もいなかった。

「誰？」
「こっちだよ。」

テイルスが辺りを見渡していると、頭上の方から声がした。
上を見ると、そこには黒い羽を広げ、飛んでいる鳥がいた。

「えっと、誰ですか？」

テイルスは自分の頭上から数メートル付近を飛んでいる鳥を見つつ、問いかけた。

「自分はティース・ザ・レビンと言う者だ。　ちょっと聞きたいことがあるんだけど、いいかな？」
「あ、はい。」

テイルスはティースと名乗った鳥を見つつそう言うと、飛んでいたティースは少し前へ飛び、テイルスの前に降り立った。

「ここら辺に、橙色のボディに、黒いダイヤ形の斑点を持った豹は住んでいないかな？」
「豹？」

テイルスはふと問いかけられ、少々悩んでいた。

『ええっと、最近あった豹って言ったら・・・　あの人かな。』

テイルスは探している豹を記憶の中から探し、思い当たる人物が１人出てきた。

「えっと、その豹って、胸に星型の傷がある？」
「ああ、あるぜ。」
「緑のマントに、黄色い冠を見につけてる？」
「ああ。」
「じゃあ、あの人なのかな・・・」

テイルスは自分が知っている豹が、今自分の目の前に立っている人の探している人と同じだと思った。
以前工房にやってきた、橙色の豹。

「もしかして君、その人知ってるかい？」
「うん。　思い当たる人が１人いるんだ。」

テイルスはほぼ確信し、ティースに言った。

「何処にいるか、知らないかな。」

ティースはテイルスに問いかけた。

「ううん。　以前友達と一緒に来た位だから、何処にいるかはわからないんだ。　ゴメンね。」

テイルスは首を横に振りつつ、ティースに言った。

「そうか。　でもこの辺りに住んでいるのは収穫だな。　どうもありがとう。」

ティースはテイルスにそう言うと、羽根の付いた手を広げ、空へと飛んで行った。
テイルスは飛んでいくティースを見ていた。

「テイルスー」

ティースが何処かへ飛んでいくのとほぼ同時に、テイルスのいる場所にストレンジャーがやってきた。

「あ、ストレンジャー」
「休憩か？」

テイルスのそばにやってきたストレンジャーは、テイルスに問いかけた。
ストレンジャーからの問いかけに、テイルスは頷いた。

「ストレンジャー。　この前僕の所に来た豹って、名前何て言うの？」
「豹？　コレージの事か？」
「多分そうかな。　ストレンジャーが倒れた時に来たんだけど。」

テイルスは自分が会った時の状態を思い出しつつそう言った。

「コレージ・ザ・ウィッシャーって言うんだ。　俺達みたいな種族で言うと、オセっていう存

在だ。」
「そのコレージって言う人を探している鳥がいたんだ。　でも僕は、コレージが何処にいるのか分からなくって。」

テイルスは先ほどまでいたティースの事を思い出しつつ、そう言った。

「コレージならトロピカルアイランドかテトラクリスタルアイランドにいると思うぜ。　でも何でそいつはコレージを探してるんだ？」
「僕もよくわからない。　普通に探してたみたいだけど・・・」
「そうか。　一応確かめてみるか。」
「お願いしてもいい？」
「ああ。　了解だ。」

テイルスからお願いされ、ストレンジャーはＯＫを出しつつ言った。

「じゃあちょっと行って来るな。」
「うん。」

ストレンジャーはワープゾーンを開きつつ、テイルスに言った。
テイルスはストレンジャーがワープゾーンに入っていくのを、見送っていた。

　テトラクリスタルアイランド

テイルスからの依頼を受け、ストレンジャーはワープゾーンを渡って島へと戻ってきた。

『この島でいるとしたら、あの場所だな。』

ストレンジャーはコレージがいそうな場所を推測すると、目的地へ向かって走って行った。

ストレンジャーが向かって行った先は、泉の庭園から少し森を進んだ場所にあるストレンジャーの花園だった。
花々はテイルスに会う前に世話をしたため、綺麗に咲いていた。

「コレージ。　いるかー」

ストレンジャーは花園から辺りの森を見渡しつつ、コレージを呼んだ。
すると、

ガサガサッ

森の一角から足音が聞こえてきた。

「呼んだか？　ストレンジャー」

森から出てきたのはコレージだった。
いつものスタイルで、緑のマントに金の冠をつけていた。

「呼び出してゴメン。　ちょっと聞きたい事があるんだ。」
「珍しいな。　なんだ？」

コレージは花園へと足を踏み入れつつ、ストレンジャーからの質問を受ける体制になった。

「コレージの知り合いで、鳥っているか？」
「鳥？　ああ、いるぜ。　多分カイムのことかな。」
「そいつとコレージって、どういう関係なんだ？」

ストレンジャーはコレージに思い当たる人物がいることを確認し、問いかけた。

「表向きはソロモン王に仕える同僚だな。　プライベートだと、友人かな。」

コレージは思い当たる人物を考えつつ、ストレンジャーに言った。

「友人か。　ならいいか。」
「何がだ？」
「実はさっきテイルスから聞いたんだが、コレージを探している鳥がミスティックルーインにいたそうだ。」

ストレンジャーは先ほど入手した情報を、コレージに伝えた。

「俺を探してる？」
「ああ、今ならまだ近くにいると思うから、会いたかったら探してみたらどうだ？」
「・・・」

コレージはストレンジャーにそう言われ、少々悩んでいた。

「どうした？」
「・・いや。　何でもない。　とりあえず情報感謝だ、ストレンジャー」

コレージはストレンジャーにそう言うと、マントを翼に変え、飛んで行った。

『素直じゃないな、コレージ。　とりあえず、コレージの命を狙っている奴じゃなさそうだな。
　テイルスに報告するか。』

ストレンジャーは飛んで行くコレージを見つつ、再びミスティックルーインに向かって行った。

　ミスティックルーイン周辺　ミドルガーデン

「そうか、ありがとう。」

一方こちらは、コレージを探していると思われるティース。
ミドルガーデンに咲く花々を見つつ、そう言っていた。

『ここら辺じゃ目撃情報は無い、か。　すると先ほどの狐のいる辺りが無難か。』
「こんな所で、何してるんだ？」

ティースは１人考え事をしていると、後方から声をかけられた。
ティースが振り返ると、そこにはソニックが立っていた。
声の主はソニックだったのだ。

「自分の大切な存在を探しているんだ。　君、この辺で橙色のボディに、ダイヤ型の黒斑を持った豹を見たことないか？」
「豹？　アイツの事か？」
「知っているのか？」

ソニックはティースから問いかけられそう言うと、ティースは反応し再び問いかけてきた。

「ああ、名前は確か・・・　コレージとか言ってたな。」
「コレージ！！」

ソニックはそう言うと、ティースは大声で反応した。

「そいつがどこにいるか、知らないか！？」

ティースはソニックのそばへ行き、至近距離から問いかけた。

「おい近いって。　確かあの時はテイルスの工房であったが、いつも何処で住んでいるんだろうな。」

ソニックは自分に近づくティースを押しつつ、そう言った。

「テイルスって。」
「２本の尻尾を持った黄色い狐だ。」
「・・・さっきの子狐か。」

ティースはソニックからそう言われると、少し後ろへ下がりつつそう言った。

「多分そこで待っていれば、時期に会えるんじゃないか？」
「・・・そうだな。　そうさせてもらうか。」

ティースはそう言うと、手に羽根を生やし、両手を動かして空へと飛び立った。
ソニックはそんなティースを見つつ、一足先にテイルスの工房へと向かって行った。

　ミスティックルーイン　テイルスの工房

休憩を終え、テイルスは１人ジュースを片手に雑誌を読んでいた。

「テイルス。」

テイルスが雑誌を読んでいると工房のドアが開き、ストレンジャーが入ってきた。

「お帰りストレンジャー。　どうだった？」
「とりあえずコレージの知り合いみたいだ。　暗殺者の類じゃなかったぜ。」

ストレンジャーは先に入手した情報を、テイルスに伝えた。

「そっか。　よかった。」
「テイルスー　いるかー」

２人がリビングで会話をしていると、外から声がし、ソニックが入ってきた。

「いらっしゃい。　ソニック。」
「久しぶり、ソニック。」

ソニックが工房内に入ってくると、２人は挨拶をした。

「よ、ストレンジャー。　テイルス。　ちょっと頼みたい事があるんだが。」
「何？」

テイルスはソニックに呼ばれ、ソニックの元へ。

「ちょっとお前に頼み事がある奴がいるんだ。」
「もしかして、後ろにいるティースの事？」

テイルスはソニックの後ろに立っているティースを見つつ、問いかけた。

「ああ。　もう知り合いだったんだな。」

「それで、頼み事って？」
「自分から言います。」

テイルスは再びソニックに問いかけようとすると、ティースは前に出つつ言った。

「コレージの出現場所がここしかないんだ。　しばらく居候させてもらえないか？」
「居候？」
「やっぱりコレージの知り合いか。」

テイルスはティースからの依頼を考えていると、ストレンジャーも入り口に集まりつつそう言った。

「君は？」

ティースはストレンジャーを見つつ、問いかけた。

「俺はストレンジャー・ザ・ドラゴン。　コレージの言うカイムって、お前の事か？」
「君は、この中で一番コレージに詳しそうだな。　そうだ、俺はティース・ザ・レビン。　カイムと言う鳥の種族だ。」

２人は自己紹介をし、しばらく沈黙があった。

「とりあえず中に入って。　立ち話もなんだから。」

テイルスはふと思いつき、３人に提案した。

「そうだな。」
「お邪魔します。」

３人はテイルスに言われると、素直に行動した。

「コレージはオセ、自分はカイム。　自分達は元ソロモン王に仕えし存在だ。」

ティースは近くのソファに座り、ストレンジャー達に説明した。

「コレージってただの豹じゃなくて、オセだったのか。　ストレンジャーの周りにはそう言う変わった種族が多いな。」
「そうだな。」

ストレンジャーはソニックからそういわれると、相槌を打った。

「君達は、何の種族なんだ？」

ティースはソニック達を見つつ、そう言った。

「俺はただの青いハリネズミさ。　音速で走る、青いハリネズミ。」
「僕も普通の狐だよ。　尻尾の本数が普通じゃないけど。」

ソニックとテイルスはそれぞれ種族をいい、ちょっと変わった点を言った。

「君は？」

ティースは２人から聞き終えると、ストレンジャーにも同様に問いかけた。

「俺は青龍だ。　この島から遠い場所にある島に住んでる、青龍族の族長さ。」
「青龍。　確かに普通に龍じゃないと思っていたが、青龍だったのか。」

ティースはソファから立ち上がり、ストレンジャーを至近距離から観察しつつそう言った。

「それで、ティースはコレージに何の用なんだ？」

ストレンジャーは少々気になっていた事を、ティースに問いかけた。

「自分の憧れの存在であるコレージは、とある事件の後、行方不明になったんだ。」
「行方不明？」

ティースは先ほどまで座っていたソファに戻りつつ、ソニック達にそう言った。

「俺達が仕えていたソロモン王は、とある２人の刺客を呼び、俺達と戦わせたんだ。」

ティースは顔色を暗くしつつ、そう言った。

「どうして・・・」
「分からない。　でも俺達が個々でそいつらと戦い、俺は負けて気を失った。　その後だ。　ソロモン王に仕える７２柱の１人、コレージが行方不明になったのは。」

「コレージは、そいつらと戦って海に落ちた。」

ティースの話を一通り聞き、ストレンジャーはそう言った。

「え？」
「どういうことだ？　ストレンジャー。」

ストレンジャーがそう言うと、ソニック達は次々とストレンジャーに聞きなおした。

「少しだけなら、事件の事は俺も知ってる。　コレージに聞いたんだ。　コレージはそいつらとソロモン王の交渉話を聞いてしまい、先に奴らに襲われたんだ。　崖に追い込まれ、戦い、敗北して胸に傷を負って海に落ちたんだ。」

ストレンジャーはコレージの言っていた事を思い出しつつ、そう言った。

「それで、崖に血が。」

ティースは自分達が住んでいた島での事件を思い出し、そう言った。

「じゃあ、コレージは。」
「大丈夫だ。　胸の傷は塞がってるし元気にしてる。　今の住居は、俺が仮住居として住んでいたトロピカルアイランドに住んでもらってる。」

ティースの心配そうな顔を見た後、ストレンジャーはそう言った。

「じゃあ、前までストレンジャーが住んでいた家は、コレージが住んでるんだね。」
「そうだ。」

テイルスからの問いかけに、ストレンジャーはそう言った。

「さっき、テトラクリスタルアイランドで会ってティースの話をしたら、空に飛び出した。
多分、今、お前を探してると思う。」
「じゃあ、自分も探さないと。」
「待った。」

ティースはストレンジャーからの話を聞き、外へと出ようとしたが、ストレンジャーは制止した。

「２人とも探したら行き違いになる。　留まってるのが先決だ。　大人しく待ってなよ。」
「だが、」
「今までティースがコレージを探してたんだ。　今はコレージがティースを探す番だぜ。」

ストレンジャーはティースをなだめるようにそう言った。

「・・・分かった。」

ティースは納得し、再びソファに座った。

「しばらく厄介にならせてもらう。　テイルス。」
「うん。　いいよ。」

ティースからの依頼に、テイルスは承諾した。
そして４人は、コレージが来るのを待っているのであった。

　トロピカルアイランド

『ここにもいない、か。』

コレージは１人、トロピカルアイランドを歩き、ティースを探していた。

『まさかここらに７２柱の１人が来るとは思わなかったな。』

コレージはひとまずストレンジャーの住んでいた家へと向かい、桜の木を見ていた。
島の気候は暖かくいつも夏のような気候だが、桜の樹には四季が存在しているらしく、今は花は無く緑色の葉をつけていた。

『もといた島にはもう戻れないが、あの島にいるソロモン王に仕えていたほかの７１人は生きている。』

『あいつの言っていた事は正しかったな。　今の俺にはあの島の場所は分からない。　探すにも場所や手がかりが無い。　でも、探してもらえれば会えるって訳か。』

コレージは以前戦った刺客の言っていた事を思い出し、ふとそう思った。

『テトラクリスタルアイランド、ミドルガーデン、トロピカルアイランド、他にこの周辺で行けるとしたら、ミスティックルーインかオリエンタルシティ、か。』

コレージは次の探す場所の検討をし、マントを翼に変え、空へと飛んで行った。

　ミスティックルーイン　テイルスの工房メカエリア

一方、こちらはコレージの到着を待つティース達。

テイルスの提案により、ティース達はメカエリアへと向かっていた。

「よいしょっと！」

テイルスは壁についていたレバーを下ろし、エリア内の照明をつけた。
すると、目の前にはテイルスが今まで発明してきたメカ達が照明に照らされ、姿を表した。

「す、凄い・・・」

ティースは自分の目の前に広がる光景を目の当たりにし、少し前に出つつ言った。

「こんなにたくさんのメカを、テイルス１人で？」
「うん。　メカを作ったりいじったりするのが好きなんだ。」

テイルスはティースにそう言われ、素直に答えた。
ティースは１つのメカのそばへと行き、メカに手を当てた。

「・・・」
「どうかな？」

テイルスはティースのそばへ行き、ティースに問いかけた。

「テイルスは、ここにいるメカ達を大切にしてるんだな。」
「うん。　どうして？」

ティースにそう言われ、テイルスは再び聞きなおした。

「ここにいるメカ達がそう言ってる。　作り出してくれてありがとうって。」
「ティースは、メカの言葉が分かるの？」
「俺の種族はカイム。　いろんな言語を使うことが出来るんだ。　メカに問いかけて、返ってきた返答を言っただけだ。」

ティースは目の前にあるメカを別の角度から見つつ、テイルスにそう言った。

「凄いね。　そんな能力があるんだ。」
「でも基本的に戦闘ではあまり役に立たない。　コレージの方が優秀だからな。」
「コレージにも、そういう能力があるの？」

テイルスはティースの言った事を聞きつつ、問いかけた。

「ああ、コレージの能力は読心術。　相手の心を読むことが出来るんだ。」
「確かにそうだな。　むやみに使っていない所を見ると、必要な時にしか使ってないみたいだからな。」

ストレンジャーはティースの言った事を聞きつつ、そう言った。

「コレージに聞いた所、知りたくない事もあるから無闇に使わないんだと。　心の声を聞きすぎたくないんだとさ。」
「そうだな。　本心を聞きたいと時もあれば、聞きたくない時もあるからな。」

ストレンジャーはティースの言った事に相槌を打った。

「？　テイルス。」

ティースはふと、別のメカのそばへ行き、テイルスに声を掛けた。
そのメカはエブリィだった。

「何？」
「このメカ、少し調子が悪いみたいだ。　それに日の明かりにも触れたいって言ってるぜ。」
「そういえばグランプリ以降全然メンテナンスしてなかったね。　ゴメンねエブリィ。」

テイルスはそう言いつつ、エブリィの車体に触れた。

「後でちゃんとメンテナンスするからね。」
「お願いします。　だとさ。」

ティースはエブリィの言った事を聞きつつ、テイルスに言った。

「そろそろ戻ろうか。」
「そうだね。」

ふとソニックは提案し、ティース達は工房へと戻って行った。

一方、変わってこちらはコレージ。

『確か、このあたりにいると思うんだが。』

ミスティックルーインに到着し、とある場所に立ちつつ辺りを見渡していた。
それは、テイルスの工房の屋根の上だった。

『外にはいなそうだな。　工房内を見てみるか。』

コレージはふとそう思い、屋根に手をかけつつ下へ降り、部屋の中を見た。
そこには誰もいなかったが、マンホールのふたが開き、テイルスが顔を出していた。

『メカエリアに行っていたみたいだな。　！？』

コレージはそんなテイルスの様子を見ていると、そこからはソニック、ストレンジャー、そしてティースが出てきた。

「ティース！！」

コレージは急なことに声を出し、工房の入り口へと向かって行った。

「？」

工房内に帰ってきたティースは、何処からか自分を呼ぶ声がし、あたりを見渡した。
だがそばには誰も折らず、外にも人影が無かった。

「どうしたの？」

ふと、テイルスはティースの様子を見てそう言った。

「いや、特に。」

バンッ！！

ティースがそう言うと、工房の扉が勢いよく開けられた。
そこにはティースの会いたかった人物が立っていた。

「コレージ！！」
「ティース！！」

２人はほぼ同時にお互いの名前を言った。
するとティースはコレージの元へと走り出し、抱きついた。

「コレージ！　会いたかったぜ！！」
「ティース。　俺もだ。」

コレージはそう言うと、ティースの頭を撫でた。

「よかったねティース。」

テイルスは２人のそばへ行き、ティースに言った。

「ああ。　！　ゴメン！　コレージ。」

ティースはテイルスに向かってそう言うと、自分がしていた行動を思い出し、コレージから離れた。

「コレージ。　よくこの場所がわかったな。」
「偶々だ。　探す場所がここかオリエンタルシティだと思ったからな。」

コレージはストレンジャーからの問いかけに答えた。

「お、俺。」
「ここじゃあ何だから、ある場所へ行こう。」

ティースが言おうとしている事を振り払い、コレージはふとそう言った。

「じゃあな、世話になったなテイルス。」
「ううん。　２人とも行ってらっしゃい。」

ティースはテイルスにお礼を言うと、テイルスは答えた。
２人は外へと出ると、コレージのいうとある場所へと向かって飛んで行った。

　カフェ『Ｍｉｄｄｌｅ　Ｇａｒｄｅｎ』

ティースは無事、コレージとの再開を果たした。
２人はテイルス達にお礼を言うと、しばらく空を飛び、ラプソディの経営するカフェへとやってきた。

「ここだ。」

コレージは島に足をつけると、ティースの方を向きつつそう言った。

「ここは。」
「俺のマスターの経営するカフェだ。」
「マスター？」

ティースはコレージの言った事に疑問を抱いていると、コレージはカフェへと入っていった。
あわててティースも後について行った。

リリリン♪

「いらっしゃいませー　あ、コレージさん。　いらっしゃいませ。」

コレージ達が店に入ると、ラプソディは笑顔で２人の元へとやってきた。

「マスター。　しばらく貸切にしてもらってもいいか？」

コレージはラプソディに少し遠慮がちに提案した。

「えっと、そろそろ閉店時間なので、構いませんよ。」
「すまないな。」

ラプソディはコレージからの依頼を受け入れ、入り口の看板を『ＣＬＯＳＥＤ』に変えた。

「えっと、何になさいますか？」

ラプソディはカウンター内に戻りつつ、コレージとティースに問いかけた。

「俺はオレンジジュース。　ティースは？」
「自分もそれで。」

ティースはよくわからないまま、コレージと同じものを注文した。

「かしこまりました。　少々お待ちくださいね。」

ラプソディは２人の注文を聞くと、商品の用意をし始めた。

「コレージ。　さっきから分からなかったんだが、マスターって。」

ティースはラプソディが作業している所を少し見た後、隣に座っているコレージに問いかけた。

「ああ、そのままの意味だが。」

コレージはティースからの問いかけを、そのまま返した。

「説明してもらえるか？」
「別にいいぜ。」

コレージはティースからそう言われると、ラプソディを見つつ話し始めた。

「俺達は元々、７２柱の幻獣として主に仕えていた。　だがあの時、主は俺達に自由を与えるために２人の刺客を雇った。」
「それが、あいつらか。」

ティースは思い当たる人物を思い描いていると、コレージは頷いた。

「俺達に自由を与えるためには、主の親『ソロモン王』の遺言に従わなければならなかったんだ。」
「遺言？」
「『７２柱の幻獣に自由をあたえるなら、力でそれを得させろ』と。　ソロモン王は言ったそうだ。」

コレージはそう言いつつ、少し顔を横にそらした。

「それで、俺達に戦いを挑んできたのか。　やつらは。」

ティースはあの時起こった事件の真相を知り、そう言った。

「あの時の様子だと、俺とティース以外の７２柱の幻獣達は、皆やられたのか？」

コレージはふと、刺客の言っていた事を思い出し、ティースに問いかけた。

「ああ、俺の知っている限りでは、皆胸に攻撃されて倒れたんだ。」
「やっぱりそのやり方か。」

コレージは戦った時の事を思い出し、そう言った。

「コレージはやられなかったのか？」
「ああ、１人はあの時いた青龍、ストレンジャーに倒してもらった。　もう１人は俺がな。」
「そうだったのか。　あの青龍はやっぱり強いんだな。」

ティースはストレンジャーの事を思い出しつつ、そう言った。

「コレージよりも強いのか？」
「ああ、俺が１対１で戦いを挑んだら、負けちまった。」
「そうなのか・・・」

「お待たせしました。　オレンジジュースです。」

２人の話が一通り終わった所を見計らい、ラプソディは注文の品を出した。

「ありがとうマスター。」
「ありがとうございます。」

２人はそれぞれジュースを受け取り、ラプソディにお礼を言った。

「美味しい。」
「だろ？　トロピカルアイランドのオレンジだからな。　やっぱり美味しいぜ。」
「そう言ってもらえて良かったです。」

ラプソディは２人の歓声を聞きつつ、笑顔で言った。

「それで、事件の事は分かった。　マスターの件はどういうことなんだ？」
「ああ、そっちはまだだったな。」

コレージは一旦オレンジジュースを置き、話に入った。

「俺達の主から自由を貰って、俺達は自由になった。　そして、ラプソディが新しく俺のマスターだと分かったんだ。」
「それは、どういう事だ？」

ティースは再び、コレージに問いかけた。

「あの事は、ティースに話していいのか？」

コレージはラプソディの方へと顔を向け、問いかけた。

「ええ、この方も、自分の守備範囲の方です。　構いませんよ。」
「ティースもか。　ならいいな。」

ティースは奇妙な２人のやり取りを聞いたあと、コレージは再びティースの方へと向いた。

「信じてもらえるかは分からないが、聞いてもらえるか？」

コレージは、ティースに真剣な表情で言った。

「ああ、いいぜ。」

ティースはコレージの顔を見つつ、そう言った。

「ここにいるマスター、ラプソディ・ウルフは、俺の事を作り出した神なんだ。」
「！？　ゴホッ！」

ティースは飲んでいたジュースを一気に飲み、少々むせた。

「大丈夫か！？」

コレージは衝撃の言葉を聴いたティースの様子を見つつ、そう言った。

「あ、はい。　大丈夫です。　ゲホゲホ・・・」
「水をどうぞ。」

ラプソディは急遽水を用意し、ティースに手渡した。

「・・・ふぅ。」

ティースは水を一気に飲み、少し落ち着いた様子となった。

「どういう意味なんだ？　神なんて。」
「そのまんまさ。　俺達は作り出された存在、オリジナルキャラクターなんだ。　お前もそうだぜ。」
「え！？　自分も？」

ティースはコレージからそういわれると、驚きを隠さず言った。

「それを証明することって、可能か？」
「そうだな。　マスター、こいつのプロフィールは分かるか？」
「もちろんですよ。」

コレージはラプソディに問いかけると、ラプソディはそう言った。

「ティース・ザ・レビン。　種族はカイムで、７２柱の１人。　コレージさんとは先輩後輩、またはチームメイトの立場ですね。　使える能力は全生物に対しての言語力。　機械から植物まで、あらゆる物質に対して対応している能力ですね。」
「凄い、全て当たってる。」

ティースは目の前にいる知らない人物からの答えに、驚いた。

「ちなみに、事前に打ち合わせはしてないぜ。」
「そのようだな。」
「自分は、コレージさんのマスターでもあり、ティースさんのマスターでもあります。　この世界にいる存在は、ほとんどが自分が作り出した方々です。　本当のマスターは、こちらにはいらっしゃいませんが。」

ラプソディは笑顔で２人に言った。

「なんだかよくわからないが、今のコレージにとって守るべき存在なのか？」
「そうだな。　マスターは俺達を作り出してくれた存在だ。　守るのは当たり前さ。　マスターが居なくなってしまえば、俺達の存在は消えてしまうからな。」

コレージはラプソディを見つつ、そう言った。

「そうなのか・・・」

ティースは２人の様子を見つつ、そう言った。

「コレージ。　俺と一緒に、元の島には帰らないか？」
「え？」

ティースはふと、自分がここに来た目的を思い出し、コレージに問いかけた。

「行方不明になった７２柱の１人、オセ。　俺が旅をしていた目的は、コレだからな。」
「そうだったな。」

コレージはティースが来た目的を知り、そう言った。

「どうする？　一緒に帰るか？」
「・・・」

コレージはティースからの提案に、迷っていた。

『今の俺には、守るべきマスターがいる。　だが仲間が探していたということは、皆が心配している。　だがストレンジャーに頼まれた依頼もある。　でもティースが・・・』

コレージは考えが中々まとまらず、困っていた。

「コレージさんの好きにしてください。」

コレージが迷っていると、ふと、ラプソディがそう言った。

「え？」
「自分を守ってくれる事は確かに嬉しい。　感謝しています。　でもそれだけの理由で、ここに留まることは無いんですよ。　チームメイトの方が探してくれていたということは、心配していたとも言えます。　それに、例え元いた島に帰ったとしても、こちらに来れない訳ではありませんからね。」

ラプソディは笑顔でコレージに言った。
コレージは頭を少し下げ、決断した。

「ティース。　俺はここに残るぜ。」

コレージは真剣な表情で、ティースに言った。

「分かりました。」
「えっ、いいのか？」
「今の暮らしを壊すことは自分はしたくありません。　自分の憧れの方が好きな生活を送ってくれる事は、自分にとっても嬉しいことです。　他の方々には、安否とこれからの事をご報告しておきますね。」

ティースはコレージの手を握り、そう言った。

「ありがとう、ティース。」

「じゃあマスター。　また来るぜ。」

コレージとティースは立ち上がり、扉へと向かって行った。

「ご馳走様でした。」
「ありがとうございました。　またいらして下さいね。」

コレージ達が店を後にすると、ラプソディは２人を見送っていた。

店を後にすると、島には綺麗な夕日の光が照らされていた。

「コレージ。　コレをお渡ししておきますね。」

ティースはコレージの方へと振り返りつつ、何かを手渡した。

「コレは・・・　あの時の笛。」

コレージは受け取ったものを見つつそう言った。
受け取ったのは、羽の形をした笛だった。

「コレージに会ったら渡したいと思ってたんです。」

「これはいつもお前が持っていた笛じゃないか。　いいのか？」
「ええ。　それに１つではありませんから。」

コレージは受け取った笛を見つつティースに言うと、ティースは持っていたもう一つの笛を出した。

「この笛を吹いたら、必ず自分はコレージの下へと現れます。　この綺麗な音色は、自分の耳には必ず届きます。」
「再開の音色を奏でるわけか。　懐かしいな。」

コレージはそう言いつつ、笛を吹いた。

♪～～　♪～♪～～

笛からは綺麗な音色が奏でられ、風に乗って吹かれて行った。

「懐かしい。　この笛の音。」
「自分とおそろいです。　この笛を見て、自分の事を忘れないでくださいね。」
「ああ、ありがとうティース。」

コレージはティースにお礼を言いつつ、握手した。

「皆によろしくな。」
「はい、コレージもお元気で。」

ティースは腕に羽を生やすと、空へと向かって飛んで行った。

「ありがとう！　ティース！！」

コレージはティースに向かって手を振ると、ティースは手を振り替えした。
そして、ティースは元いた島へと向かって飛んで行ったのであった。

『ありがとう、ティース。』

コレージは受け取った笛を見つつ、心の中でそう言った。

ーＥＰＩＳＯＤＥ　ＥＮＤー